

# 更級への旅

87

更級村初代村長の塚田小右衛門（雅丈）さんが編んだ歌集が、ご子孫の塚田せつ子さんのお宅に伝わっています。幅十三センチ、長さ二十センチ、現代でいう新書サイズを一回り大きくしたノートで、表紙に「古今姨捨山詩歌集」（下の写真）とタイトルが記されています。全八十二ページ。さらしな・姨捨をモチーフに、古来都人や貴人たちが作った和歌に加え、ご自身の詠んだ歌も盛り込まれており、うれしくなりました。

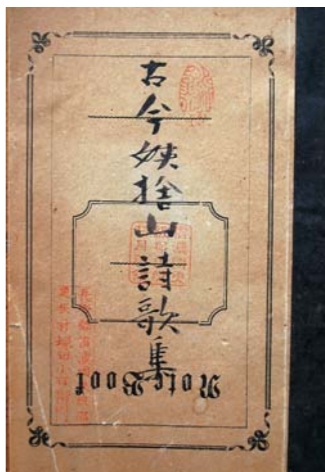
## 集歌編んだ村長更級初代

左の写真をご覧ください。末尾の見開きのページにしたためた雅丈さん直筆の歌です。下段の歌の左端には「大正六年元日 塚田雅丈」とあるのが、雅丈さんが六十九歳のときの歌です。七十五歳で亡くなるので、晩年に詠んだことになりました。明治 大正時代までは今のように漢字とひらがなが明確に使い分けられておらず、漢字も音読みにしてひらがなのように使う変体平仮名がよく使われました。現代人には判読が難しいのですが、書き手の癖を知ればなんとか読めます。以下の句歌は私の解説、解釈です。上の歌は

人はみないつしか  
老いて影なくも  
世になす業の  
あとは残れり

人はだれしも年をとる、存在感も薄くなっていくものだが、世の中になした仕事はしっかりと残っている。更級村という村名にするのを主導したのと、古来の冠着山が都の人には姨捨山と認識されていたこと、一流の学者や政治家を招いて村おこしをしたことなど、これまでのシリーズで触れてきた雅丈さんの仕事の数々を思い出せば、この気持ちよくわかるのではないだろうか。

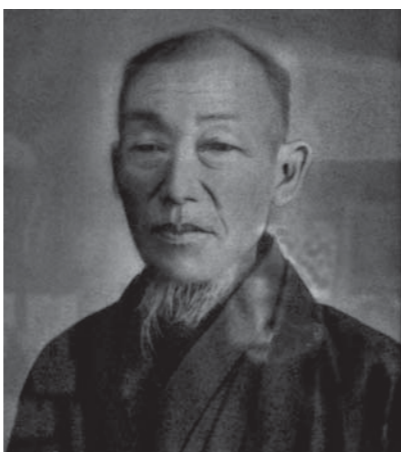
雅丈さんは七十歳を前にして自分の死を明確に意識していたと思います。今でこそ七十歳はまだ現役ですが、当時は栄養も豊かではなく肉体力労働もきつかったたので、「いつ死んでもいいように」という覚悟が求められたと思います。この歌からは、年



をとつてさびしい気持ちもあるが、やるべきことはみんなやったという充実感も読み取れます。

雅丈さんが一番脂が乗って仕事のできた壮年時代は日清、日露戦争など日本が欧米諸国の植民地になるかもしれないという危機の時代でもありましたから、やらなければいけないこと、考えなければいけないことが多く、時間の経過はとも早く感じたとと思います。その気持ちがよくうかがえるのが下段の歌です。

生まれたる  
我が年月をかずれば  
はや七十世の春は来にけり



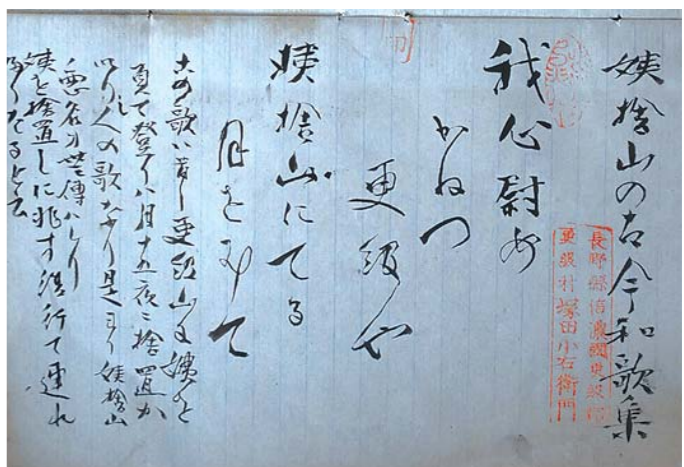
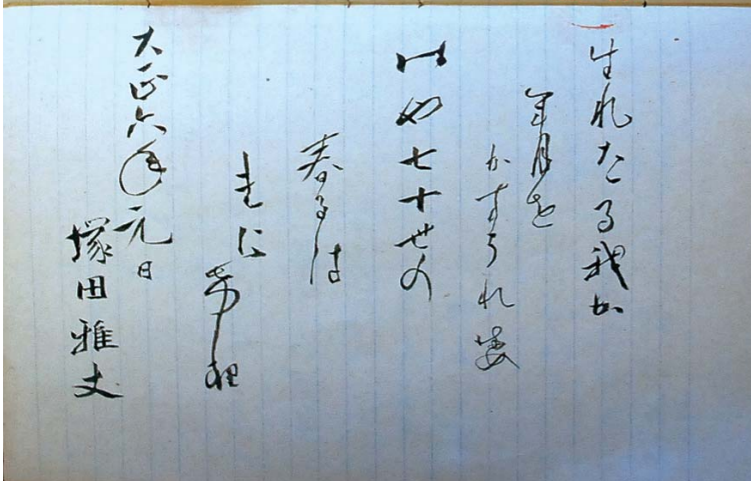
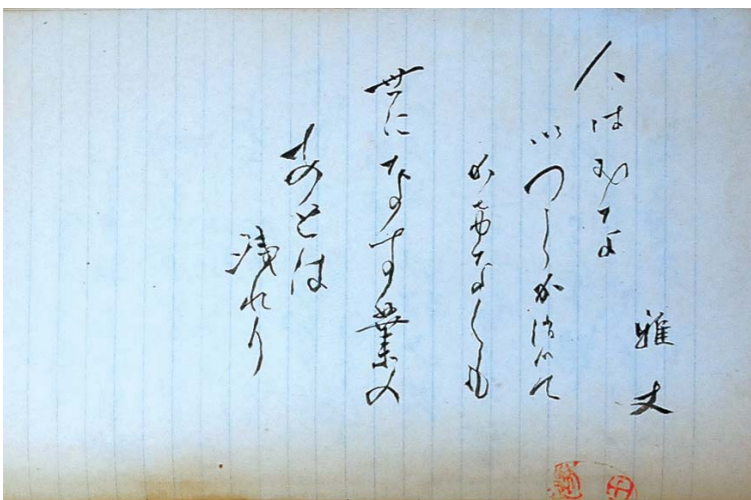
人間の一番大事なものは誠心である。地域の人のために一心で尽くすことがその人の評価を決める。財産や地位には関係ない。雅丈さんが人道主義者であったことが分かります。あまたの私財を、村のため、村人のために使ったその原動力はこうした考え方の持ち主だったからです。

更級で見る月のすばらしさを詠んだ歌もあります。

見る月は何処も同じ月なれど  
景色に富める更級の山

「更級の山」は冠着山のこと。更級という言葉が好きでしようがない雅丈さんの気持ちがうかがえます。「古今姨捨山詩歌集」の特徴は古人だけでなく雅丈さんと同時代の人たちの歌もたくさん盛り込んでいることです。県歌「信濃の国」の作詞者の浅井洌（シリーズ18に登場）、「汽笛一声新橋を…」の鉄道唱歌の詞を作った大和田建樹（同51）、古来の姨捨山は冠着山であったことを論証し

人はみな  
いつしか老いて影なくも  
世になす業のあとは残れり



た「姨捨山考」の著者佐藤寛(同30)：冠着山の復権運動に協力してもらった人たちの記念歌集とも言えます。

もう一度晩年の雅丈さんについてです。雅丈さんの生きた時代を直接知っている方のお話に触れることができました。シリーズ54で登場していた雅丈さんのお孫さん、塚田浅江さんです。戸倉公民館長をお勤めだった竹内長生さんが公民館報で更級地区（旧更級村）の偉人の一人として雅丈さんを取り上げたのですが、その中に雅丈さんについての記憶を浅江さんが語った記事があります。

幼かった浅江さんの目から見ると雅丈さんは白髪と鬚があり、どことなく気品がありました。一日の大半は執筆・思索・読書・散歩。浅江さんは雅丈さんと話をするのが好きで、人の持つべき心の示唆を受けたといいます。雅丈さんは多くの友人と交際しており、使い走りをする「おおよくした」とよくねぎらわれていたそうです。中央の写真はせつ子さんのお宅の座敷に掲げられた雅丈さんの肖像画です。シリーズ53は雅丈さんをカメラで撮った写真ですが、これは画です。浅江さんの目に映った鬚の雅丈さんに近いと思います。

臨終のときの様子についてもシリーズ53で紹介しましたが、印象的なのもう一度記します。雅丈さんは普段と変わりない朝を迎え、お昼ご飯を食べた後、シーツのしわまでのばした布団の上に気持ちよく仰向けになり、「大あくびをして大往生をとげた」そうです。「古今姨捨山詩歌集」を編んでから五年後、大正十一年（一九二二）、九月三日のことでした（浅江さんは二〇〇〇年、九十歳でお亡くなりになりました）。

右下の写真は「古今姨捨山詩歌集」に掲げられたトップの歌。古今和歌集収録の「わが心慰めかねる更級や姨捨山に照る月を見て」です。

発行 二〇〇九年三月一日  
編集 さらしな堂  
（代表・大谷善邦）  
〒三八九・〇八一三  
長野県千曲市大字若宮一八四・六  
（旧更級郡更級村）